

「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」構築のための実践研究

—クラスワイドからスクールワイドへの展開—

特別支援・相談課 田中 清章 嶋田 聡 福崎 久美
廣島 慎一 大久保秀昭

要 旨

発達障がいのある児童の在籍している小学校において、学級単位・学校単位の一斉指導における指導方法の改善に向けた取組を行い、学校全体の支援体制構築に向けた実践研究を行った。全教職員が目標を共通理解することで、学習準備行動の向上や問題行動の減少等といった成果がみられた。

キーワード：スクールワイドPBS，クラスワイドPBS，授業改善，支援体制，望ましい行動

I はじめに

インクルーシブ教育システムの構築が進むとともに、教育的ニーズに対する考え方は多様化している。また、発達障がいを含む何らかの原因により生じている「小1プロブレム」、「中1ギャップ」問題等を未然に防ぎ、学校生活に不応を起ささない取組も求められている。そのため、全ての教職員が発達障がいを理解し適切な対応ができる専門性を備え、指導力を向上させることが求められている。また、平成28年4月の障害者差別解消法の施行など、共生社会の実現に向けた特別支援教育の充実は喫緊の課題である。

こうした課題解決のため、当センターでは学校全体で取り組むポジティブな行動支援を徳島県南部の幼稚園、小学校、中学校各1校で実施した。授業改善についてのデータ収集に重点を置き、授業のユニバーサルデザインを「学力差や発達障がいの有無にかかわらず、全員の子供が楽しく『分かる・できる』ように工夫・配慮された通常の学級における授業」として展開してきた。これらの成果を他市町村でも検証し、さらに全県へ広げるために県西部の東みよし町立加茂小学校を実践校として、教職員の発達障がいに対する理解啓発に取り組み、児童の早期支援と教職員の指導力の向上を図ることとした。

II 研究の実際

1 研究の目的

発達障がいの可能性のある児童の学習面や行動面での困難さを改善・克服するための早期からの適切な指導・支援等について研究し、市町村の小学校への支援体制の構築を図る。

成果等については、徳島県立総合教育センターのホームページを活用して県内の全学校において閲覧できるようにデータベース化を行い、発達障がいに関する理解と教職員の指導力向上を図る。

2 学校全体で取り組むポジティブな行動支援について

児童生徒が示す問題行動によって、学校における本来の「学び」が成立しなくなってしまう

という事態は避けなければならない。児童生徒の問題行動に対して、適切に支援を行い、社会性をはぐくむことは、学校教育において児童生徒に学業を教えることと同様に重要である。問題行動を解決するためには、「問題行動を罰する」のではなく、「望ましい行動を育てる」という発想が必要である。そして望ましい行動を育てるためには、3つのポイントが不可欠である。それは、「教えること」、「ほめること」、そして「環境を整えること」である。望ましい行動を効果的に教わることで、その行動ができた際に賞賛や承認を受けること、そして、適切に行動しやすい環境を整えることで、「すべての児童生徒」が、望ましい行動を学ぶことができる。学校全体で取り組むポジティブな行動支援では、第1層支援(学校・学級規模)から第2層支援(配慮の必要な一部の児童生徒)、第3層支援(特別な支援を必要とする個人)へと階層的で連続的な支援システムを設け、第1層支援を充実させることによって、個別性の高い第2層支援や第3層支援を真に必要とする児童生徒への支援へと絞り込むことが可能となり、教員の時間や労力が限られている状況においてよりの確な支援を行うことができる。このように問題行動の解決に向けた個別の支援(第2・3層支援)だけでなく、学校における問題行動の予防に向けた組織的アプローチも重要と言われている。「全ての児童生徒」を対象とすることで、「問題の解決」だけでなく、「問題の予防」にも取り組むことができる。これらの考え方は、「罰を使うことなく、望ましい行動を育てる」という点で「肯定的(Positive)」であり、「問題が起こる前から取り組む」という点で「積極的(Positive)」である。この2つの意味の「ポジティブな支援」を、学校規模ですべての児童生徒を対象として実施するアプローチが「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」(School-Wide Positive Behavior Support)である(以下「スクールワイドPBS」と示す)。

これまで発達障がいのある児童生徒への対応については、専門家の助言を受けながら、個々の児童生徒への支援を中心に取組を行ってきた。平成28年度からは、東みよし町立加茂小学校を実践校として、「学級単位(クラスワイド)」から「学校単位(スクールワイド)」へと、発達障がいのある児童に対する学校全体の支援体制構築に向けた実践研究を実施してきた。本実践研究は、発達障がいの可能性のある子供たちだけでなく、全ての児童生徒を対象とした学校全体の子供たちの成長につなげる支援として、全国に先駆けて実施している。加茂小学校では、友だち同士の「助け合う言葉がけ」や「朝の挨拶」、「授業準備」など学校目標となるポジティブな行動を見つけて褒めたり、具体的な成果を数値で児童に示したりする取組を学校全体で展開している。こうした取組により、学級や学校全体、家庭で児童の望ましい行動が増え、更に組織的、計画的に、その望ましい行動を引き出し、定着させることで、社会性の向上が見られた。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 学校単位で取り組むスクールワイドPBSについて

(1) 取組を進めるためのステップ

加茂小学校では、次の1～3のステップ(図1)にそって、スクールワイドPBSに取り組んだ。

ステップ1

- ① 児童に期待する学校目標「3つの大切」を考える(全ての教職員)
- ② 学校目標達成に向けて取り組む具体的な場面や活動をリストアップする(全ての教職員)
- ③ 場面毎に学校目標を達成するための具体的な行動が何であるかを考える(全ての教職員)

ステップ2

- ① どの行動に取り組むか優先順位を付ける(全ての教職員)
- ② 児童へどのように行動を教えるのか計画する(全ての教職員、特定の教職員)

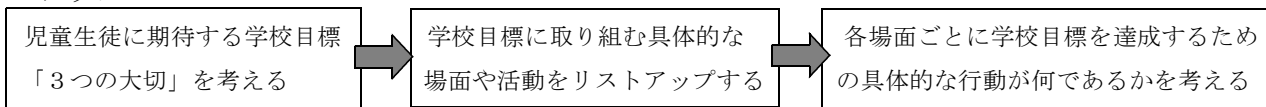
③ 計画を実行する（それぞれの教職員）

ステップ3

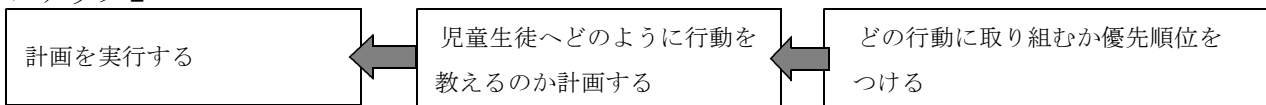
① 行動の記録を取って評価と修正を行う（全ての教職員，あるいは特定の教職員）

② 計画の修正と行動目標の見直し，新しい行動目標の追加

ステップ1



ステップ2



ステップ3

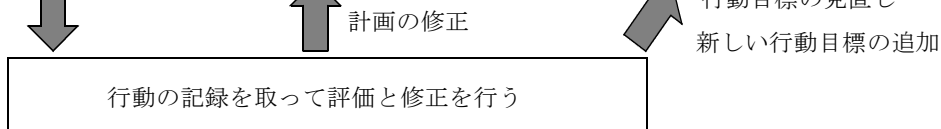


図1 スクールワイドPBS取組のフローチャート図

(2) 「3つの大切」の具体化（マトリックス図の作成）

① 「3つの大切」を決定

児童が，どの場面でどのような行動をしているかを観察し，全教職員は，加茂小学校の課題や児童の伸ばしたい力を話し合った。さらに，専門家からアドバイスを受けて，加茂小学校が大切にしたい「3つの大切」を決定した。

② 「3つの大切」を全教職員で取り組む

全教職員が学年別のグループに分かれて，「3つの大切」の内容を実際の行動に置き換える作業（具体化・可視化）に，演習形式で取り組んだ。全ての教職員が学校目標を共通理解し，取り組むことが大切である。平成28年5月30日，畿央大学大久保賢一氏が加茂小学校を訪問し，コンサルテーションを行った。教職員全員に向けてポジティブな行動支援はどのようなものなのか，子供たちに望ましい行動を育てていくために児童に対してどのような対応をしていけば良いのか，賞賛の仕方やポイントについて等の研修を行った。また当小学校でスクールワイドPBSを行うにあたって，目標設定の仕方や今後の進め方，予定を全教職員に周知した。

コンサルテーションでの話をもとに，6月2日，全教職員で特別支援教育コーディネーターを中心として学校において児童に期待する望ましい行動と具体的な場面を設定するための話し合いを行い，教職員が児童に期待する望ましい行動を学校目標として3～5つ決めた。その目標を横軸に示し，縦軸には教職員が考えるその目標に取り組んで欲しい具体的な場所や場面を示した。話し合いの結果，学校目標として，①きまりを守ろう，②自分も友だちも大切にしよう，③すてきなことばをかけよう，の「3つの大切」を設定し，そして具体的な場所，場面として①授業中，②体育（体育館），③そうじ，④休み時間，⑤廊下の5つを設定

した。次に、教員同士の話し合いで、活動や場面ごとにそれぞれの学校目標を達成するためにはどのような行動ができれば良いのかを考え下位目標とした。下位目標は学校目標に対応する3つのグループに教職員を分け、適宜テーブルチェンジを行って全教職員が全ての目標について考えた意見を付箋に書いて意見交換を行い、修正などを加えて下位目標を決定した。このようにして、「3つの大切」を具体化した（表1）。

マトリックス図の全ての学校目標の中から、加茂小学校の児童に付けたい力を精選し、優先度の高い「挨拶」から指導を開始した。

表1 「3つの大切」の具体化（マトリックス図）

	きまりを守ろう	自分も友だちも大切にしよう	すてきなことばをかけよう
授業中 （教室）	<input type="checkbox"/> 授業が終わったら次の授業の準備をしよう <input type="checkbox"/> 授業が始まる時にえんぴつ2本・赤えんぴつ1本・けしごむ1こを机の上に用意しよう	<input type="checkbox"/> 話をしている人の方へおへそを向けよう <input type="checkbox"/> 「同じです」「そうだね」「わかりました」「うなづく」など発表している人に反応しよう	<input type="checkbox"/> 「です・ます」のような丁寧な言葉を使おう <input type="checkbox"/> 指名されたら「はい」と返事をしよう
体育 （体育館）	<input type="checkbox"/> すばやく集合・整列しよう <input type="checkbox"/> 使った道具は元の場所にもどそう	<input type="checkbox"/> 授業の準備や片付けを友だちと協力してやろう <input type="checkbox"/> 相手チームのすごいところをほめる言葉で伝えよう	<input type="checkbox"/> 自分のチームが負けても「がんばろう」「ドンマイ」と声をかけよう
そうじ	<input type="checkbox"/> そうじ場所にある決められたマニュアルのとおりそうじをしよう <input type="checkbox"/> 自分の分担場所をそうじ時間内にきれいにしよう	<input type="checkbox"/> そうじ分担をみんなで協力してやろう <input type="checkbox"/> 自分のそうじ分担が終わったら、まだ終わっていない人を手伝おう	<input type="checkbox"/> そうじのはじめと終わりに同じ分担の人とあいさつをしよう
昼業 休 み 休 み	<input type="checkbox"/> トイレをすませてから遊ぼう <input type="checkbox"/> 予鈴を聞いたらずぐに教室にもどろう	<input type="checkbox"/> 友だちと話をするときは「あったか言葉」を使おう <input type="checkbox"/> 友だちの名前をよぶときは〇〇さんとよぼう	<input type="checkbox"/> 友だちに「ありがとう」「ごめんね」と言おう
ろうか	<input type="checkbox"/> ろうかや階段、ベランダでは右側を歩こう	<input type="checkbox"/> 前から人が来てすれちがうときには「どうぞ」とゆずりあおう <input type="checkbox"/> 人にゆずってもらったら「ありがとう」と言おう	<input type="checkbox"/> 先生やお客さんとすれちがうときには軽く頭を下げよう <input type="checkbox"/> 学年がちがっても朝や帰りのあいさつを大きな声で言おう

（3）学校目標「挨拶」を学校全体で実施

加茂小学校で複数取り組んだ学校目標の中から、「挨拶」について成果を報告する。

① 学校目標「学年が違っても大きな声で挨拶しよう」（平成28年8月～11月実施）

マトリックス図の全ての目標の中から、対象校の児童に身に付けさせたい力を教職員が話し合いで精選し、優先度の高かった「挨拶」を目標とした。登校時、児童が行う挨拶を学校目標とした。また、本研究の挨拶は、「児童から声を出して挨拶をする行動」もしくは、「プロジェクトに関わる委員会の児童（以下「委員会の児童」と示す）又は教職員からの挨拶に

対して声を出して挨拶を返す行動」であると定義した。

② データ収集方法と結果の算出

毎朝登校時に全児童が通る東門で、週に1度（主に金曜日）「自分から先に進んで挨拶をした児童」「挨拶をしたらずぐに返せた児童」「スルー又は挨拶をしなかった児童」の3つについて、それぞれに当てはまる児童数を数える。記録は教職員と委員会の児童が協力して行った。記録の算出は、「自分から先に進んで挨拶をした児童」／「東門を通った児童数」×100、「挨拶をしたらずぐに返せた児童」／「東門を通った児童数」×100、「スルー又は挨拶をしなかった児童数」／「東門を通った児童数」×100という数式によって算出し、それぞれの割合をパーセントで表した。

③ 支援計画

委員会の児童が「自分から先に進んで挨拶をした児童」「挨拶をしたらずぐに返せた児童」「スルー又は挨拶をしなかった児童」の人数をカウントした。学校長が全校朝会で学校をよりよくするためのスマイルプロジェクトとして、「挨拶の風」「おそうじがんばるの風」「やさしい思いやりの風」の3つの風を吹かせようという話をした。学校長の話の後にプロジェクトに関わる委員会の児童が全校児童の前で良い挨拶の例をロールプレイで示し、良い例の挨拶をしていこうと児童に挨拶を促した。目標達成の基準としては、95%以上の児童がスルー以外の行動を取ることができ、それが5日間継続できれば 目標達成として記録を終了することとした。

④ 実施方法

本研究は介入を実施していないベースライン期と介入期を比較することにより介入効果を評価する研究デザインを適用した。

○ベースライン期

委員会の児童と教職員で東門に立ち、「自分から先に進んで挨拶をした児童」「挨拶をしたらずぐに返せた児童」「スルー又は挨拶をしなかった児童」の人数をそれぞれカウントして記録し、それ以外は、従来通りの対応を行った。

○介入期

9月5日の全校朝会で学校長が「3つの風」という題目で全校児童に対してスライドを用いて挨拶をすることの大切さや良い挨拶の仕方について話をした。その後、委員会の児童が、実際にどのような挨拶が気持ちが良いのかについて全校児童の前でロールプレイングを行い、良い挨拶の例を示した後に再度同じ条件で児童数を数えた。

委員会の児童と教職員が数えたデータをもとに、学校長が10月3日の全校朝会で挨拶の取組について良いところや毎朝元気な挨拶が聞こえてきて気持ちが良いなど、全校児童にフィードバックを行った。加えて「スルーや挨拶をしない児童がいなくなるようにみんなががんばろう」「出来ている人は笑顔で挨拶することを意識して、少し頭を下げて挨拶をしてみよう」など、全校児童に挨拶を促した。

⑤ 結果

調査を行った結果を図2に示した。ベースライン期では、「挨拶をしたらずぐに返せた児童」は約50%~70%ほどだったが、「スルー又は挨拶をしなかった児童」は8月30日を除いて20%程度であり、「自分から先に進んで挨拶をした児童」との割合がほとんど同じであっ

た。全校朝会での学校長の話や委員会の児童によるロールプレイの介入を行った次の日から約10日間程度は「スルー又は挨拶をしなかった児童」が全体の30%を上回ることはなく、「自分から先に進んで挨拶をした児童」の数がベースライン期よりも高くなっていった。しかし、介入の効果はあまり続かず、介入から2週間ほど経過すると「自分から先に進んで挨拶をする児童」が減少し、ベースライン期と同じ程度の割合になることや、「スルー又は挨拶をしない児童」が30%以上に戻ってしまう日があったため、不安定な結果となった。

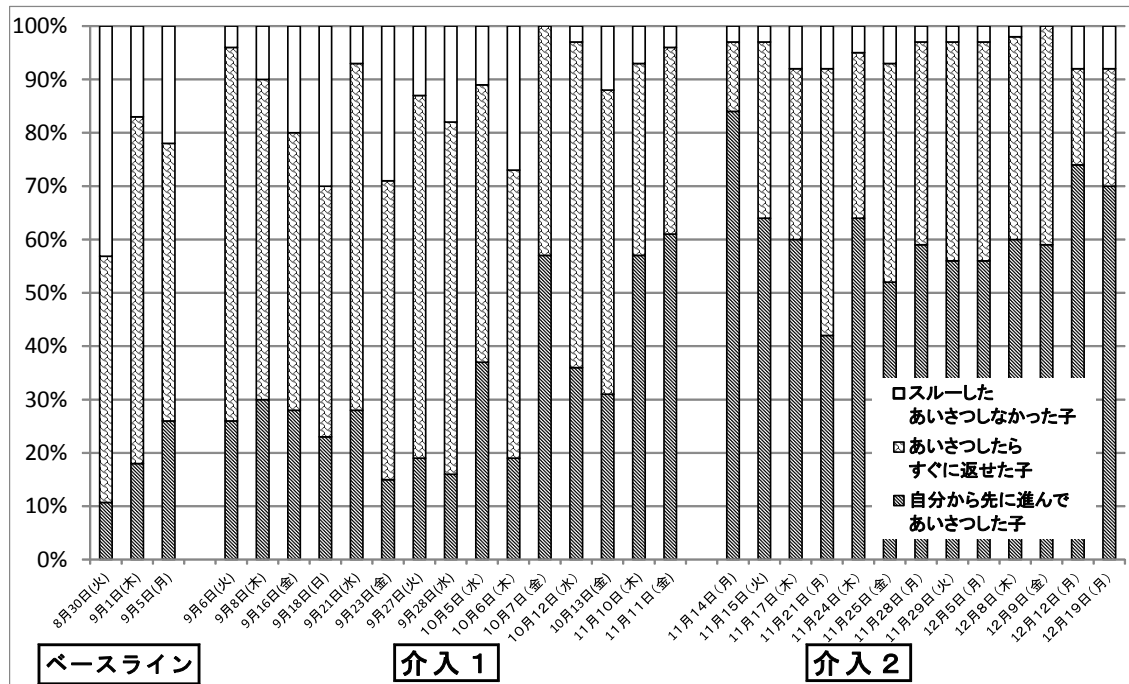


図2 朝、自分から挨拶をした児童の割合

全校朝会で学校長がフィードバックや挨拶を促す介入2を行うと、2日後には「自分から進んで先に挨拶をする児童」の割合が取組のなかで最も高くなる日があり、「スルー又は挨拶をしない児童」の数が0になることもあった。記録を取る日によって多少の変動はあるものの、記録を取り始めてからおよそ2か月間で90%以上の児童が「自分から先に進んで挨拶をした児童」、「挨拶をしたらすぐに返せた児童」の項目に当てはまり「スルー又は挨拶をしなかった児童」の数値が10%未満にまで減少する結果となった。

2 学級単位で取り組むクラスワイドPBSについて

加茂小学校の学級単位で取り組んだ学級目標の中から、「あったか言葉」について成果を報告する。

(1) 学級目標「友達のいいところ(あったか言葉)探しをしよう」

- ① 期間：平成28年5月～9月実施
- ② 対象：3年生1学級（児童数26名）
- ③ データ収集方法と結果の算出：児童間でお互いに認め合う行動の指標を、「いいところ探し」のカード投函数とした。

(2) 支援計画

専門家（近畿大学大対香奈子氏）がコンサルタントとして対象学級の観察及び担任教員との協議を行った。担任教員から、子供同士の関わりを増やし、自主性を高めたいという要望があり、実際に観察でも子供同士のポジティブな声かけがほとんど見られなかったことから、「いいところ探し」の取組を行うことを決定した。

(3) 実施方法

○ベースライン期

ベースライン期は、教室にポストとカードを設置し、友達のよい発言やよい行動を見つけたらカードに書いて投函できるようにした。

○介入期

介入1では、帰りの会で投函数やカードに書かれた内容（特に書かれることが少ない児童についての内容）を紹介してフィードバックを行った（介入1-1）。また、介入1の途中から、担任教員が選んだカードを教室に掲示するようにした（介入1-2）。介入1では、投函した児童が一部に限定的になっている傾向が見られ、また投函数も大きくは増加しなかった。その原因として「いつでも見つけた時に書く」という設定が考えられたため、介入2ではカードに記入するための時間を確保することにした。カードの累積投函数が増えるにしたがって、自然発生的に児童たちから「1000枚目指そう」という声が起こり、8月1日時点から目標投函数が1000枚と設定された。

(4) 結果

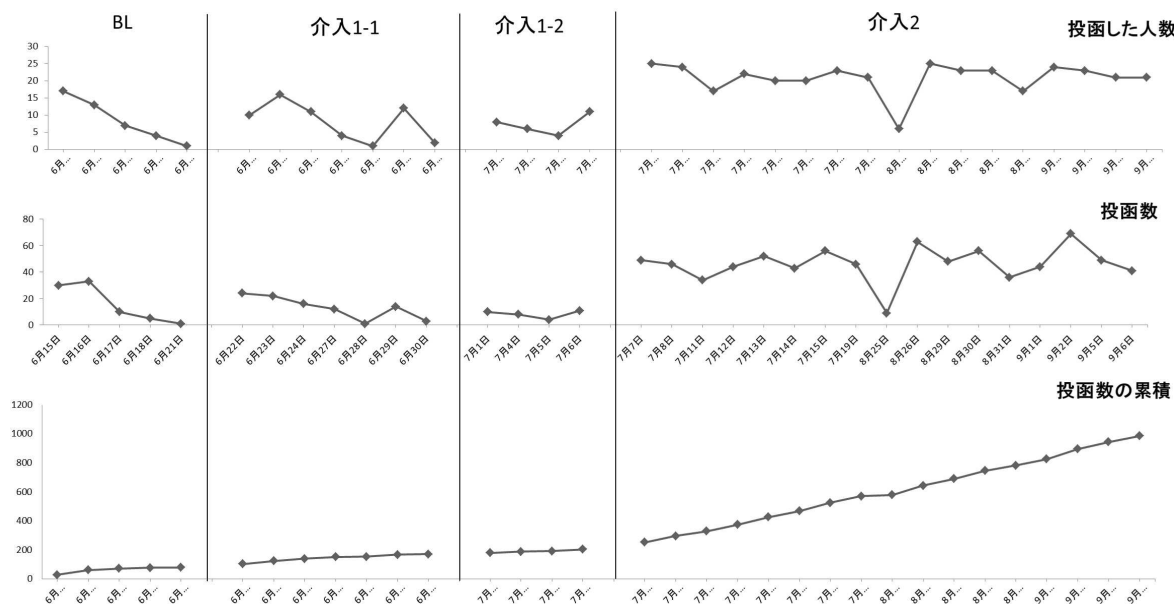


図3 カード投函行動の変化

図3には、カードを投函した人数、投函数、累積の投函数の変化を示した。介入2の開始と同時に、投函者の人数、投函数が共に大きく増加した。「いいところ探し」の取組によって、児童間で認め合う様子が見られた。「いいところ探し」は、児童同士が認め合う環境設定を作り出すことから、本研究のようにスクールワイドPBSの導入に向けて学級で取り組んでおくことで、学校目標を教職員からだけでなく児童間でも強化することが可能となり、スクールワイドPBSの効果をより高めることが期待される。

3 実践研究報告会について

本事業における成果普及について、次のように実施した。

- (1) 日 時：平成29年2月24日（金） 午後1時30分から午後4時45分まで
平成29年2月25日（土） 午前9時15分から午後零時15分まで
- (2) 会 場：徳島グランヴィリオホテル（徳島県徳島市万代町）
- (3) 参加者（1日目：151名 2日目：143名）
幼稚園，小・中学校，高等学校，特別支援学校教職員，福祉施設職員等
- (4) 日 程

2月24日（金）

- 13：30 ～ 開会・事業説明：徳島県教育委員会
13：45 ～ 14：45 行動コーチングアカデミー代表 奥田健次 氏 講演会
講演内容 「支援の輪を拡げるための支援」

14：55 ～ 15：45 ポスター発表 前半（50分間）

15：55 ～ 16：45 ポスター発表 後半（50分間）

ポスター発表内容

- ・加茂小学校等で取り組んだスクールワイドPBSの
実践研究等の紹介

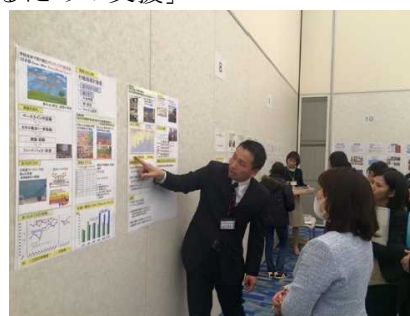


写真1：スクールワイドPBSのポスター発表

2月25日（土）

- 9：15 ～ 10：30 法政大学教授 島宗理 氏 講演会
講演内容「学びを促進する教育環境を情報技術で整備する」

10：45 ～ 12：15 シンポジウム

学校全体で取り組むポジティブな行動支援の最先端
～東みよし町立加茂小学校の日本版スクールワイドPBSの実践報告～
話題提供者 畿央大学 准教授 大久保賢一 氏

東みよし町立加茂小学校長 田岡茂樹 氏

東みよし町立加茂小学校

特別支援教育コーディネーター 樋口直樹 氏

徳島県立総合教育センター班長 田中清章 氏



写真2：スクールワイドPBSのシンポジウム

(5) 成 果

参加者は、特別支援学校や小・中学校教員だけでなく、県内の障がい児通所支援事業所や大学院生等の参加も多く盛会であった。加茂小学校の取組であるスクールワイドPBSやクラスワイドPBSの取組の実践研究，学習教材のポスター発表は，参加者の好評を得ることができた。

参加者アンケート結果

○実践研究等のポスター発表は、今後の実践研究に行かせるか？

大いに生かせる76.2% 概ね生かせる23.8% あまり生かせない0% 生かせない0%

○スクールワイドPBSのシンポジウムは、今後の実践研究に生かせるか？

大いに生かせる73.1% 概ね生かせる26.9% あまり生かせない0% 生かせない0%

参加者からは、「加茂小学校の先進的な取組に驚きと敬意を伝えたい」、「目標設定→達成→賞賛のサイクルを取り入れたい」、「マトリックス図は非常に参考になった」などの感想が多数聞かれた。

(6) スクールワイドPBSの活用について

加茂小学校が開発した各種シートや教材等は、徳島県立総合教育センターホームページ内の「特別支援まなびの広場」に公開し、県内外の教職員がダウンロードできるようにした。



図4 徳島県立総合教育センターホームページ「特別支援まなびの広場」

4 研究支援システム「電子掲示板」の活用について

本実践研究では、徳島県立総合教育センター内のサーバーを活用し、テレビ会議や掲示板を活用した研究支援システムを導入することで研究体制の整備を進めた。

シンポの内容について
樋口直樹 2017/02/02 05:51:43

大久保先生・田中先生

いつもお世話になっています。
先日のテレビ会議お世話になりました。

スライド作成に当たって、学校長と話し合い、次の通り役割を分担しました。
先生方の感想や作成資料と重なってはいけいないので、掲載して調整したいので、念のためご覧ください。

【学校長】：主として概要や背景に関すること
・本校の実態、概要について
・東みよし町教育スタンダード「学びの手引き」について（背景として）
・SWPBSを進めるにあたっての校内体制について
・管理職としての関わりについて（研修体制等）
・児童への伝え方について（校風として）
・実際の校内の変化
（※学校評価として児童・保護者にアンケートをしています。その結果を紹介しようかと考えています）
※研修のこと、校内体制のこと、朝会等のこと、管理職としての関わり方等について20分程度でまとめます。

【樋口】
・あったかことばの実践・結果
・あいさつの実践・結果
・学習準備の実践・結果
・準備をどう進めたか、職員会議等での調整
・記録の取り方、体制
・初年度経験してわかったKSPの進め方、ポイント
※20分程度で

図5 電子掲示板の活用例

加茂小学校における研究の進捗状況を小学校、大学、特別支援学校、総合教育センターの担当者がテレビ会議で定期的に話し合ったり、研究を進める上で生じた疑問点などは即時に電子掲示板に書き込んだりすることで、課題を共有し円滑に研究を進めることができた。

平成28年度加茂小学校における電子掲示板による協議の書き込み回数は、次のとおりである。県が市町村を支援する際の有効なツールとして、掲示板が効果的に機能したことが明らかになった。

・学校全体におけるポジティブな行動支援の掲示板書き込み回数	373回
・クラスワイドに関する実践研究の掲示板書き込み回数	278回
	合計651回

IV おわりに

1 成果

集団指導や個別指導の充実を目指した専門家との協働による「望ましい行動を育てる」ことに重点を置いた「学校全体で取り組むポジティブな行動支援」及び学級単位の取組であるクラスワイドPBSの実践研究を行った。その結果、授業の準備物や着席行動といった学習準備行動の向上や、自分から朝の挨拶をする児童の増加等が見られるとともに、授業中や休み時間の問題行動が減少し、児童の「望ましい行動を育てる」ことにおいて、大きな成果を上げることができた。また、どの学級のどの授業も学校目標によって、授業中のルールが明確になっており、できているところを褒めて賞賛しやすいため、児童の学習への意欲も高めることができた。この取組の成果は、当センターホームページを活用してデータベース化し、発達障がいに関する理解の推進と教員等の指導力向上に活用している。

2 課題

(1) 学校全体におけるポジティブな行動支援について

- ① 学校目標のより簡易な記録方法の工夫と導入を進める。
- ② スクールワイドPBS実施のためのマニュアルと各種シートの開発を行い、幼稚園、小学校、中学校への取組の拡大を図る。
- ③ 多忙な現場に合わせた計画と方法を検討し、これまで既に行っている取組とのリンクを進め、仕事を増やさないことが重要である。

(2) 成果の周知方法について

- ① 県教育委員会主催での実践研究報告会を継続開催していく。
- ② 徳島県立総合教育センターのホームページに研究成果を公開し、さらなる充実と改善を図る。
- ③ 県教育委員会主催の職務研修において、本事業で開発した各教材を用いた研修を行い、その成果を県内に広める。

参考文献

- ・野呂文行・大久保賢一・佐藤美幸・三田地真実訳、D.A. クローン・R.H. ホーナー著『スクールワイドPBS－学校全体で取り組むポジティブな行動支援－』二瓶社、2013年。
- ・石黒康夫・三田地真実著、『参画型マネジメントで生徒指導が変わる』図書文化、2015年。
- ・石黒康夫著、『学校秩序回復のための生徒指導体制モデル』風間書房、2015年。